教職大学院 Newsletter No. 170

福井大学大学院 福井大学·奈良女子大学·岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科 since 2008.4 2024.2.13(公開版)

学びに向かう研修

福井大学教職大学院 教授 小林 真由美

先日、連携校である藤島中学校の校内研究会に参 加させていただいた。藤島中学校では今年度の初め から先生方が教科も年齢も立場も超えた5、6人から 成る4つのチームを作って、そのチームごとに研究 会を行っている。学期の節目には各チームでの学び を共有する機会もあり、チームの互いの学びの進捗 状況を確認し合っている。私たち大学院のスタッフ もこのチームに入れていただき、この1年間チーム の一員として一緒に歩んできた。昨年度までは、研究 会のメンバーを毎回変えて、できるだけ多くの人と 関わりあうように構成されていたのだが、今年度の この取組は、1年間に「チームとしてみんなで研究会 を深める」という意図で進められているそうで、毎回、 研究会に参加させていただき、4つのチームがそれぞ れに確かな歩みを見せ、話し合いが深まってきてい ることに感銘を受けている。とりわけ、若い先生方の 話は大きな成長を感じることが多く、先生方自身が このチームの深化を図ろうと前向きに学んでいる。

今回は、特に1年間の成長の振り返りをしようと、これまで記した模造紙や付箋を持ち寄って自由に各自の思いを語り合った。私が所属したAチームは「意義ある協働とは」というテーマで、チームメンバーによって4回の公開授業を行い、その度にテーマに基づいた話し合いを重ねてきた。対話には、互いに見取り合ってきた公開授業という実践が加わり、理論だけなく具体的な場面を通して何を学んできたのかが熱く語られた。4チームの語り合いの共有の場では、

「そもそも意義ある協働という意義は、教師の視点 での意義ではなく、子どもたち一人一人にとっての 意義と考えれば、それはそれぞれで違うはずでは? 私たちが今まで追っていた、目に見える成果でなく、 友達の気づきを自分の中に受け止めることさえ、そ の子にとっての意義。私たち教師はそれを見取る力 が必要」と明らかに初めの頃とは大きな深化を感じ られる発表があった。他のチームからは「こうしたチ ームでの学び合いによって、これまでのような単に 『振り返って終わり』ではない、大きな学びに対する 私たちの認識の変化があった。でも、子どもたちはど うだろうか。子どもたちは私たちのように学びのプ ロセスの大切さを感じているのだろうか、子どもた ちに振り返りをさせるときにも、この振り返りの意 味を伝え、それがどう将来につながっていくのかを 考えさせねばならない」 先生方が話やめることなく、 熱く熱くこうした語り合いをする様子に、私も胸が 熱くなった。

このような先生方の姿を見ると、本当に研究会自体が大きく変化していると感じる。今年度はNITSの研修や京都府教育委員会の研修、そして福井県の中堅教員研修など様々な研修に関わらせていただいた

内容巻頭言 (1) インターンシップ/週間カンファレンス報告 (3) ミドルリーダー/マネジメントコースだより (5) 月間カンファレンス/ラウンドテーブルだより (15) 事務連絡 (23)

が、どの研修も受講者同士の対話を中心とした主体 的な探究によるものになってきていて、従来の講義 形式からは大きく変化している。長らく福井大学教 職大学院で取り組まれてきたスタイルがようやく広 がってきたと感じている。

思い出すのは十年以上前のことだが、私が教頭研 修の一環で免許更新制講習でのグループ討議のファ シリテータを務めたときのことである。受講者の先 生から、こんな一言をいただいた。「この免許更新講 習はいったい、何を教えてくれるんですか。こんな自 分たちでの討論だけなら、自分でやりますよ。私たち はお金を払ってこの研修に参加しているんです。何 も教えてもらえないなら、お金を返してください」多 分、この方はこの講習の最後まで、この不満を抱えた ままだったことだろう。この研修のスタイルは、まず 受講者が語ることによって何かを自分で生み出して 学ぼうという気持ちにならなければ、何も生まれて こない。その意味で、この時代には理解されなかった このスタイルの意義を、今は理解していただけるよ うになり、多くのところで一般的なスタイルとなろ うとしていることを喜ばしく思う。

そういえば授業も同じだ。今や、子供たち同士の グループやペアでの話し合いは、授業の普通のスタ イルとなり、先生もよく「隣同士でちょっと感想を伝 え合ってみようか」とか「じゃ、グループで意見を交 流してみよう」という言葉をかけるようになった。子 どもたちもすんなりと向かい合って話し始めたり、 グループになったりする。一昔前までは「グループに なって」の指示にさえ、机をくっつけることを恥ずか しがってわざと離れたり、グループになっても昨夜 のテレビ番組の話しかしなかったり、そんなリアク ションへの対応が面倒で、先生もグループ活動を毛 嫌いしていた。しかし、子どもたちは主体的に学習す る本当の楽しさを知ると、すぐにそれに順応できる。 「自分たちで語り合ったり考えを出し合ったりする のは楽しい」「先生から教えてもらうより、自分で見 つけ出したことは頭に入る」授業後の感想にこんな 声があちこちから聞こえるようになった。であれば、 大人も同じはずである。この1年に何度も聞いた「子 供の学びと教師の学びは相似形」という言葉は、まさ に「授業と研修会は相似形」に置き換わる。

授業の中で子供達に「学びたい、やってみたい」と いう発意が生まれるには、それを呼び起こす課題が 大切である。研修の中で先生方が「やってみたい」と 思うにもその仕掛けが大切で、今、研修を仕組む側の 行政も私たち大学教員も日々、それを考えている。し かし、それ以上に、その研修を通して、「何かを学び たい、何かを生み出したい」そう思う参加者の意欲は 大きな鍵となる。冒頭の藤島中の先生方の様子も、そ して何よりこの教職大学院で学ぶ院生の皆様の姿に も、その鍵となる意欲が確実に育っていると感じて いる。カンファレンスに向かう院生の方々の姿は、前 向きでいつも清々しい。そして終了後には、より一層 の満足感と次への意欲に満ち溢れている。いつまで も、何かを教えてもらおうと待っているのではない。 何を学びたいのか、明確な課題を自分の中にしっか り持って、自分からその課題に挑んでいく。そんな子 どもたちを育てたいならば、まず自らそんな人間に なっていかねばならない。私自身も今、その渦の中で、 毎回の研究会やカンファレンスに向かうとき「今日 は何を学べるだろうか」とわくわくする。その思いを 日々味わうことができる今の自分を本当に幸せに感 じている。

このわくわくを呼ぶ学びがもっと広がっていき、 もっと深まっていけば、きっと日本は大きく変わる。 きっと子供たちはもっと力を発揮する。そう思うと、 このさきの未来にもわくわくが高まっていく。よう やく大きな教育改革の成果が見えて来た今、私はこ れからの日本に大いにわくわくしている。

H

インターンシップ・週間カンファレンス報告

記録を振り返って気づいたこと

授業研究・教職専門性開発コース1年/福井県立高志高等学校 笈田 峻汰

新しい年を迎え、新しい目標を立てる人もいれば、 昨年の目標を継続する人もいるだろう。 昨年からの 継続といえば、私にとってはインターンシップが真 っ先に思い浮かぶ。

私は、学部時代で高めた専門数学からの見方を生かすことを考え、入学当初からインターンシップでは、教師それぞれの授業スタイルや教科専門性を軸に日々授業を拝見している。普段の学校生活では生徒と積極的に関わり、関係づくりに力を入れている。今回はインターンシップの中で印象的な出来事や感じたことについて述べようと思う。

数列の漸化式の授業を参観したときに A 先生は漸 化式の型を一通りした後に応用例題を解く流れだっ たのに対し、B 先生は特性方程式から隣接3項間の漸 化式に進んだ。先生が違うのだから進め方が違うの は当然である。しかし、この2人の先生が来年似た ようなかたちで授業をするかは分からない。理解度 はクラスによって違うし、S先生は「どんなクラスに 出会うかは一期一会」ということを話されていた。そ れだけ同じクラスは存在せず、様々な方法があると 感じた。さらに、S先生と話をして印象的だったこと がある。それは授業の「改善」が「改悪」になるかも しれないということである。授業を変えることは必 ずしもいい方向にいくとは限らない。変えたことで、 悪い方向にすすむ可能性もある。変えることが怖い、 だから変えないとなると授業改善がなかなか進まな いのだと思う。今まで改善という視点でしか見てい なかったが、改悪という視点を得ることができた。

次に、生徒の学校生活を見ていて感じたことがある。実は、インターン先の高志高校は自分の母校でもある。自分が生徒だったときと比較して大きく変化

していると感じたことがある。それは個人の主体性が高いということである。学校祭の各部門のリーダーや実行委員会に立候補する生徒が多くいた。しかし、担当の先生はすぐに受け入れるのではなく、「どんな部門にしたい?」や「なんで部門長したい?」という意見を求めていた。すぐに答える生徒もいれば悩む生徒もいた。これは主体性を高める教師の声掛けといえる。ただリーダーをするのではなく、なぜリーダーをするのか、部門をどうしたいのかを主体的に考えるきっかけになっている。このような声掛けも普段からしていくことで主体性を高めていることに気づいた。 授業の中で主体性を高めるときもあれば、学校行事を通して主体性を高めるときもあることを目の当たりにした。

最後に遠足に引率したときのことを述べる。ここで考えたのは、教師の役割である。1つは安全管理であると考える。普段より生徒もテンションがあがって事故が起きやすいだろう。集団の先頭を歩く、危険なことは毅然と注意することは言うまでもない。また、生徒の頑張りを褒めることも教師の重要な役割である。今回の遠足の帰りのバスの中で遠足の企画の中心になった生徒がどんなことをしていたかを教師がクラス全体に話すときがあった。他の生徒もそれを聞いて感謝の気持ちや自分も何かしたい意欲につながる。なにより中心となった生徒の行動が価値づけされていることが大きいと考えた。

ここまで遠足の準備やその中での教師の役割を考えたが、遠足に参加しなかった生徒もいた。体調不良で休む生徒もいれば人間関係で休む生徒もいる。そういった生徒にどのような対応をしていくのか考えていかなければならない。自分が教員になったとき

にも同じことがあるかもしれないため、もう少し深く考えていきたい。

今回のニュースレターは自分の感じたことや考え たことを中心に述べてきた。今までの授業の記録や 記憶を辿ると、ほとんどに子どもの姿があることに 気づいた。自分が意識していなくても何かしらのかたちで子どもが関わっている。これからもインターンシップを続けるなかで、様々なことを学び、記録にし、振り返る習慣を大切にしたい。

授業の面白さを感じる

授業研究・教職専門性開発コース1年/福井市明新小学校 永合 祐貴

自分は教職大学院に入るまでは工学部に所属していた。工学部に所属している間、児童クラブでアルバイトをしており、子どもたちの遊び相手になっていた。アルバイトをする中で教師の言葉や行動によって成長する子どもたちを見て、子どもたちの成長の手助けがしたい、子どもと関わる仕事がしたいと思い教職大学院に入学した。

春からインターンが始まった。自分はアルバイト をしているときに、もめ事などにうまく対処できな かったため、インターンシップで、「学校の先生は子 ども同士のもめ事や集団から外れた行動にどのよう な支援をするのか」ということについて特に知りた いと思っていた。しかし、インターンでは思っていた ような支援がみられることが少なかった。そもそも 学校と児童クラブでは先生と子どもたちとの接する 時間や距離感が違い、自由な時間も違うため、もめ事 が起きることが少なかった。思った支援が見られな かったため、自分はインターンに行く目的を見失っ ていた。インターンに行っている間、子どもたちの様 子をメモにとるのだが、そのどれもがありきたりで インターンに行かなくてもわかるようなメモも多か った。また、周りの先輩方のメモの量を見てメモしな ければならないという強迫観念も抱えていた。

そんな自分に転機が訪れた。インターン先の学校で算数の授業をさせてもらうことになったのだ。今まで工学部に在籍しており、授業など全くしたことがなかった自分は授業をするということに不安な気持ちが大きかった。そのため、長期間にかけて指導案

を考えることにした。大学の数学科の教授に授業の 作成を手伝ってもらい、授業の練りなおしを何度も 行った。また、インターン先のメンターの先生には初 めての授業ということをご配慮いただき、何度も指 導案の見直しを行っていただいた。

こうして迎えた授業の当日、授業は所々至らぬ点はあったが、最後までやりきることができた。自分としても授業が止まらず最後まで進めたことに満足しており、なによりも授業をすることがとても楽しかった。授業中に一生懸命考えようとする子どもたちの姿、授業終わりに教卓に来て「先生の授業楽しかったよ!」と言ってくれる子どもたちの優しさに子どもたちとの距離感がぐっと近づいたように感じた。また、外から授業を見るだけではわからなかった子どもたちの考え方の違いなどを感じられた。この授業を通してあらためて、子どもたちと関わる、子どもたちの成長を手助けする教師という仕事に楽しみを感じ、教師になりたいと再度強く感じるようになった。

この授業の後、自分は授業というものにとても興味を持つようになった。インターン中は、教師による授業の進め方、発問の仕方などの違い、それによる子どもたちの学習の様子や理解度の違いを見るようにしている。今後自分がよりよい授業を行っていけるように、インターンでは、授業を見て勉強していきたいと思う。

ミドルリーダー/マネジメントコースだより

Supporting Planted Seeds

ミドルリーダー養成コース1年/勝山市北部中学校

Hartford Lauren Nichole

Since 2024 began, I have been reflecting on several areas of life, as many of us do this time of year. Reflecting on my time in the Department of Professional Development of Teachers (DPDT) program, I have many thoughts and feelings-some conflict with each other in expected or unusual ways. My perspective on many aspects of education and teaching has changed in just the last ten months. Ten months can seem like a long time. But this time has gone by in the blink of an eye. It has been full of new aspirations and challenges. New faces and ideas. Familiar faces that reveal fresh insights and revelations. It almost feels as though an entirely new teacher has emerged in the place where I used to be. But perhaps that new teacher is the one that was always here. They were planted long ago like a seed. They could finally bloom into this teacher with time, nourishment, and encouragement.

This program has allowed me to have opportunities to thrive in the study of education. Reading the many suggested books has helped me understand the inner workings of education systems and what makes them successful. The readings have also catalyzed some of my Assistant Language Teacher (ALT) peers and me to start new projects and communities of practice together, to help enrich our teachings and other ALTs outside of the program. We have started spreading these educational philosophies, like beautiful wildflowers, throughout our communities. Each month's discussions leave me feeling reinvigorated to tackle problems I have faced for some time during my career in education. After talking with many of my peers, I have collected new ideas to implement in my classes and with my schools. We share so much in

these discussions and by reading each other's reports. This sharing and cooperation are the most important things I have gained from the program. Sharing experiences and ideas has been so beneficial for me professionally and personally. I do not only mean sharing the expertise of lesson plans in a classroom. I mean the experiences of being a teacher within the Japanese education system.

As an ALT, it has been easy for me to assume that many difficulties I face in the Japanese education system exist because I am a foreigner and labeled as an assistant teacher here. I repeatedly heard that many problems would have no solution and that I should give up trying to change anything from my position. However, after many discussions with and reading reports from Japanese teachers, my perspective was turned on its head completely. We all have similar problems. They vary in degree and detail, but the other teachers share the broad challenges and frustrations I found with teaching. We could find support and understanding through our discussions. We formed common ground because we shared the desire to provide genuine education to our students. We share the same curiosity in discovering what genuine education truly means and how to make it a reality in our classrooms. The camaraderie in this program motivates me to reflect upon myself and the challenges I face. With the inspiration and understanding I found through my peers in this program, I try my best not to give up and to find solutions. Every problem has a solution. Together, we can realize and put them into action. When our solutions do not work, that does not mean we failed. We have each other for support. So we can get back up and try again and again.

I will continue to observe, listen, and learn from others. I want to collaborate with my fellow educators in research and discussions. I also want to create valuable materials that will help my peers around me, as well as future generations of educators. After the help I have received and continue to receive in this program, I want to pay it forward for those to come. I want to provide them with the tools to find and successfully apply solutions to their problems. I hope to produce advice and tools that can support my current peers and educators of the future I may

never have the honor of knowing. Thank you to those who have helped and supported me thus far in my journey to grow as an educator.

Let us all continue to work together to create supportive, nurturing soil where the seeds of students and future teachers can begin to grow and thrive into fully bloomed life-long learners and educators for generations to come.

Reflect and Renew

ミドルリーダー養成コース1年/勝山市立中部中学校 Wolff Shana Marie

This time last year I was collecting items for my application for the DPDT. Time has gone by quickly. My collection of books read, long-practice reports studied, and reports written grows monthly. The monthly conferences have opened my eyes to similarities and differences shared between my situation and my peers in the department. These two things have helped shape my focus over the last year and will assist me in completing my goals for the second year, culminating in my long-term practice record.

My previous focus in research was Geology, which depended on measurable geologic observations and laboratory analysis. Based on my background in quantitative research, early in the DPDT program, I felt somewhat less confident about conducting research based on human observation and qualitative approaches. The texts assigned have been instrumental in establishing a base of knowledge on teaching methodology and the history of education. Reading long-term practice records has helped show me the steps in how to utilize the content I am learning in my own practice. Previous ALT records have been instrumental for me to visualize how similar approaches could be applied in my own school context.

The monthly sessions motivate me to continue improving my own practice by trying new ways of presenting information, and getting my students involved in their educational decisions. At my first monthly conference I was the only ALT and foreign teacher in attendance. I was nervous about not being able to express myself and not understanding my Japanese peers. I was even more worried that I would not find a connection with non-ALT teachers. Thanks to the full support of the DPDT staff in attendance I felt heard and understood, and I found many points of connection with my peers' situations. It showed me that it did not matter what our specific job titles were, we all had similar problems, goals, and observations. I now love having discussion groups with teachers from a variety of backgrounds and teaching situations. Through these groups I learn the most about the state of the Japanese education system. In the International group we meet more frequently so I can see the progress of the other members in the group, and they can hear a more complete timeline of my development as well. The community of people within the DPDT is one of its strongest assets.

Part of being an ALT is a feeling of being alone: in the school, in material preparation, and in basic knowledge of how to perform in the ALT position. The area where I live has a high retention rate of dedicated ALTs, and through this program I now realize it is because of the community we have established in our local area. This community is both social and practice-based. Knowledge is shared between members about social events, and support is given in work-related situations. It is important for ALTs to have a strong support network outside of school because it is the primary source of our support inside and outside of school. I wish to continue developing my ALT community more and put into words how a community like ours can be made for other ALTs elsewhere.

My focus when I joined the DPDT was to become a more confident teacher and make my classes better formatted for the students. At the time this goal seemed to be enough, but there are many out_of-class factors that influence the in-class atmosphere, especially for ALTs. Some of these influences include the overall school

environment, homeroom teachers' relationship to English, the JTE-ALT working balance, and the challenge of ALTs only joining each class once or twice a week. Initially, I decided to reflect on my own teaching history and my current classes to identify what was and was not benefiting my students. This year I have been working to change my focus from top-down education to more personal student-led classes. Now in my practice I am working towards identifying the small things that make an effective and efficient class in a team-teaching situation.

One year has passed very quickly and I will be starting my second year in the DPDT soon. I am excited to grow as an educator and eager to write about my teaching practice, team-teaching accomplishments, and ALT community of practice in my long-term practice record. I am grateful to everyone who has helped me this past year and look forward to working with everyone in the year to come. よろしくお願いします!

Before Move Forward:

Looking Back on Longitudinal School Internship

ミドルリーダー養成コース2年/福井大学教育学部附属義務教育学校

Anuniwat Dhanachat

I have been living in Fukui for almost two and a half years now, particularly as a member of the DPDT. Time has flown by quickly, yet I've been fortunate to meet many wonderful people. These individuals have influenced me both directly and indirectly, helping to shape who I am and how I think today.

One of my most invaluable experiences has been immersing myself in the Japanese schooling system, where I practiced and learned to be a reflective teacher. Since schools are deeply intertwined with cultural aspects, everything related to them is inherently connected to the

culture itself (Stigler & Hiebert, 1999). Before this, I had a year of teaching mathematics in Thailand as part of my compulsory education internship during my undergraduate studies. However, I encountered a vastly different educational landscape upon arriving in Japan. As education varies according to cultural contexts, I started anew here, refreshing my perspective and deepening my understanding through practical work and theoretical research. This experience has been incredibly enriching for someone like me who aspires to teach at the university level. I feel confident enough to stand before my future students, blending my experiences with my prospective

teaching methods. I think that I have learned so much from here. First, I want to discuss the following.

Firstly, I would like to elaborate on my experience in teaching and learning mathematics from my early days to now. Before coming to Japan, my approach to teaching mathematics centered on problem-solving, encouraging students to think and learn independently, leveraging their horizontal and vertical abilities. However, from my experience, this approach had its limitations. For instance, when students solved problems using various methods or ways of thinking, some of which I was unfamiliar with, I struggled to proceed. I felt somewhat lost, lacking guidance and advice on handling such diverse factors, although I didn't want to attribute this to any cause.

After receiving the MEXT (文部科学省) scholarship to study in Japan, I had the fortune of meeting incredible mathematics teachers. I respect them as my teachers who enlighten me in many aspects of school mathematics teaching and learning. These teachers possessed sharp observational skills and a quick, thoughtful mind, inferred from the teachers' lessons I observed. Through daily observation of their practice, I gradually grasped the nuances of their teaching methods, which differed from those I used in Thailand. The teachers I met consistently extended and developed lessons based on student ideas, prioritizing student voices and quickly adapting to their needs. My learning from them went beyond mere techniques or know-how; it was about understanding the process of their teaching approach since students' thoughts and voices are individualist. I feel incredibly fortunate to have had the opportunity to learn from these teachers, and I cherish these experiences deeply. I am unsure if I will ever have a chance like this again, but it has undoubtedly been a transformative part of my journey as an educator.

Secondly, I want to discuss learning to be reflective teachers or reflective practitioners. Before coming to Japan, my teaching approach was routine, carried out repetitively every day without looking back at the process or jotting down notes about it. However, upon my arrival in Japan, I found an environment where everyone encouraged each other to reflect on their practices. Reflection helped me realize the importance of critically examining one's teaching methods; this perspective became clear to me. For me personally, reflection went beyond simply revising teaching practices. It helped me understand my own thoughts and discover who I am as an individual. I used to think I knew myself well, but through continuous reflection on my practice, I realized that the person I thought I was is quite different from who I am now. This realization, although centered on just myself, has been profound. I believe this is the power of reflective practice—it not only enhances one's teaching abilities but also fosters personal growth and self-awareness. Becoming a reflective teacher has been a transformative journey, and it is a significant part of what I have learned and who I have become as an educator today.

To conclude, my experience in Fukui, Japan, as part of the DPDT and as an internship teacher, has indeed been transformative. Immersing myself in the Japanese schooling system, I've learned to be a reflective teacher and to embrace the cultural differences in education. My journey in teaching and learning mathematics in Japan has been markedly different from my experience in Thailand, which prompted me to adapt and deepen my understanding of teaching methods. As the Organization for Economic Cooperation and Development (OECD) suggests, we don't just teach students for today, but for their future. Observing Japanese teachers, I learned the value of student-driven learning and the importance of adapting to student needs. Reflection has become a crucial aspect of my teaching practice, aiding in my understanding of not only my teaching methods but also in personal self-discovery, leading to significant personal and professional growth. This journey has profoundly influenced my approach to education and my development as an educator.

教師の役割とは

ミドルリーダー養成コース2年/岡谷市立川岸小学校 藤森 香織

もうすぐ教職大学院での学びが終わりを迎えよう としている。あっという間の2年間。忙しくも充実し た日々への満足感と大学院での学びが終わってしま うことの寂しさと、両方が入り混じった複雑な気持 ちを抱きながらこれを書いている。

昨年、今年と、多様な子どもが集まる学級でなかなか刺激的な毎日を送ってきた。今年度担任している35名の1年生。素直で元気で無邪気な子どもたちだ。子どもたちは、日々の生活の中のどんな小さなことでも私に言いに来る。身の回りの出来事、不安な感情、友達に対する不満、ケガや体の不調の訴え。本当にどんなことでも。私が他の子どもと話をしているときでさえも、「先生!先生!」と呼び、返事をするまで呼び続ける。ついつい「ちょっと待って」と言いたくなるが、グッとこらえて話を聞く。私の中では、一人一人の子どもに心を寄せ、話に耳を傾けながら、学校が安心できる場になるように努めてきた。

しかし、登校をしぶる子どもが多い。11年前に1 年生を担任したときも入学して間もない頃は、お母 さんから離れられない子どもが何人かいた。それで も、6月にもなればみんなすんなり登校していたよ うに記憶している。今年担任している1年1部は、 今もだれかしらが登校をしぶっている。時には、背中 に1人の子どもをおんぶしながら、両手に泣いてい る2人の子どもを連れ、車の中で泣いている子ども と話をするという一度に4人の子どもの対応をする こともある。今まで「おはよう」と元気に登校し、時 間まで自分の遊びに夢中になって教室に戻ってくる ということが普通のことだと思っていたが、朝がス ムーズに始まることがあたりまえではないというこ とを痛感している。朝の活動がスムーズに始まった 日は、それだけで一日の私の役目を終えたような 清々しい気になってしまう。

なぜこんなにも登校をしぶる子どもが多いのだろう。入学式で私が心から感じた「この子たちが安心して通える学校にしたい」という思い。その思いに沿って子どもと接してきたつもりだったが、まだまだ不安を感じている子ども、自分を表現できない子ども、心にある何かが払拭されない子ども。子どももさまざまな思いを抱えて登校しているのだろう。そんな子どもたちに、私が教師としてできることは何だろう。

「教師の役割」について考えてみる。勉強をできる ようにすること?給食を残さず食べるようにするこ と?掃除を黙ってできるようにすること?忘れ物を しないようにすること?与えられたことに責任をも って取り組めるようにすること?自分で考えて動け るようにすること?子どもに寄り添いながら喜びや 悲しみを一緒に感じること?子どものお助けマンで いること?子どもの成長を一緒に喜ぶこと?子ども の存在を価値づけること?思いつくまま挙げてみた が、すべて「?」である。過去の私は、ここに挙げた ことがどれも教師の役割だと断言してやっていたが、 今は、「教師の役割は○○です」と断言できない。断 言してしまったら、それに縛られて、そこから発展で きないような気がするからだ。子どもによってさま ざまな教師の役割がある。そしてそれは一人一人違 う。それぞれに合わせて、教師の役割も柔軟に変えて いかなければならない。ただ、一つだけ言えることは、 教師の役割は「子どもが幸せになるために力を尽く す」である。

1年1部の子どもたちと一緒にいられるのも残り 少なくなった。一人一人の子どもに心を寄せ、教師の 役割を考えながら、子どもたちが幸せになるために できることを考えていきたい。

学びを繋ぐ

学校改革マネジメントコース1年(1年履修)/福井市進明中学校 笠松 政世

令和6年1月、勤務校(福井市進明中学校)では、 新入生説明会(2月開催予定)の準備が始まった。こ の説明会は、保護者への説明を体育館で行うのと同 時間帯に、各教室で中学1年生が小学校6年生に中 学校生活の基本的ルールや授業、部活動等について 語る形式で企画されている。小学生と中学生のグル ープ(1グループ10名程度)を編成し、それぞれの グループで中学校生活について説明や質疑応答をす るのである。教師は様子を見守り、必要に応じて助言 するファシリテーターに徹する、「生徒主体」である。 この活動には以下のようなメリットがあると考えて いる。

【アドバイスの共有】

上級生が自身の経験や失敗、成功について話すことで、下級生は同じような状況に遭遇した際にどのように対処すべきかを学ぶ。アドバイスを通じて、下級生はより効果的な学習や問題解決の手法を身につけることができるだろう。

【共感と信頼の構築】

先輩が自身の体験を率直に語ることで、後輩との 共感が生まれ、信頼関係が構築される。これにより、 後輩は安心して先輩に質問したり相談したりするこ とができ、学びの場が広がるだろう。新入生が入学前 に上級生とコミュニケーションをとることは、勤務 校(進明中学校)が推進している縦割活動の基礎を築 いている。

【学校生活の認識】

上級生が学校生活に関する話をすることで、下級生は学校での様々な出来事や活動についてより深く理解し、学校生活に参加する意欲が高まると考えられる。これにより、下級生の学びの興味を引き出し、充実した学校生活を送る手助けとなるだろう。所謂、中一ギャップの解消に繋がることが期待される。

【目標設定とモチベーション向上】

上級生が自身の学びのプロセスや成果について話すことで、下級生は将来の目標を設定し、その達成に向けて努力する意欲が高まるだろう。先輩の成功体験は、後輩のモチベーション向上につながると考える。

【コミュニケーションスキルの向上】

上級生が話し、下級生が質問することで、双方がコミュニケーションスキルを向上させる機会を得る。 他者との円滑なコミュニケーションは、学校生活だけでなく、将来においても重要なスキルである。小グループで学校説明を行うメリットは、多くの子どもが発言する機会があることである。それによるコミュニケーションスキルの向上が期待される。

上級生が下級生に対して語り、経験や学びを共有することで、お互いの成長と発展を促進し、良い学習環境を構築することができると考え、進明中学校では「**学びを繋ぐ**」をテーマに前述のような新入生説明会を企画している。

同じように、私の「教職大学院での学びと現場を繋ぐ」という視点で考えてみたい。教職大学院の学びは、 実践の中で培った経験や知識を共有し、省察するサイクルの連続であった。このサイクルを通して、学校 現場の課題に対処する力を養う一方、私自身が最新 の理論に触れ、実際に理論を取り入れ実践に活かす ことができたと思う。このような学びの繋がりが築 かれることで、教育現場は変革し続けられ、教員たち は専門的な能力を向上させながら、子どもたちによ り質の高い教育を提供することができるだろう。ま た、教職大学院と学校現場の協力体制が構築される ことで、教育の発展が促進されるだろう。教職大学院 で学んだ時間は、私の財産である。

話し合いから始まる学校改革

学校改革マネジメントコース1年/社中央第一こども園 山田 晶子

大学院に入学してから、もうすぐ1年になる。4月から、月間のカンファレンスでいろいろな先生にたくさんのアドバイスを頂いた。そして、実際に大学の先生に園の保育を見て頂きたくさんのアドバイスを頂いた。

まず取り掛かったのが、大学の先生方から「朝の会」って何の為に行いますか?と言われた問題。「いつもしているから…」という、何も疑問にも思わなかった日常の保育。そこで、保育教諭たちとたくさん話し合いをした。するといろんなことに気が付く。「話し合いってあまりしてこなかったね。」と話が出た。

入学するまでは、それぞれが一匹狼の気質で行事 以外は、ほぼ単独で日々の保育をしていたように見 えた。

それが…月日が経ち、他園の公開保育にも積極的に参加し、そして大学の先生に園を見てもらい、世にいう「風」を入れたことで私の勤める園の保育教諭が少しずつだが変わってきているように感じた。今までだったら、「無理。人が足りない。物がない」とすぐにあきらめモードになっていたのだが、ここ最近は「ミーティングで話し合いしよう」が合言葉になってきている。

今までは伝達事項のみで一瞬で終わっていたミーティングだったが、保育で起きた問題を解決する場にもなり活発に意見が出てなかなか終わらないこともある(これも問題なのだが…)。

考えてみると、職員同士は、仲は良いのだが保育の 話はあまりしない。行事をすれば少しズレが生じて いた。

そこで私は、いろいろと問題を持って、大学に行き 学び、園に戻ってみんなで話し合いをした。そして計 画し、実践して振り返りというサイクルがいつの間 にか出来つつあるように感じた。何よりも、保育の話 し合いが以前より何倍も何十倍も行われているよう に感じる。

そして、12月初めにちょっとした問題によって私の勤める園のカリキュラムマネジメントが変わろうとしている。といってもまだ始まったばかり。毎日毎日壁にぶつかっている。しかし、保育教諭たちは、くじけていない。理由は、それぞれ自分たちが己を信じているから。「困ったら話し合いをしよう!みんなで取り組んでいる一人じゃないから」と言ってくれている。この改革は、変化が見られるし、何よりも子どもの表情が変わってきている。生き生きと遊ぶ姿が、何よりも保育教諭のモチベーションに繋がっているらしい。

自分たちが園の改革をしているという意識。私は、 伴走者としてみんなを支えている。相変わらず答え を求める保育教諭もいるが、あえて「みんなで話し合 いしよう!」と声掛けをしている。先生たちの顔は、 子どもたちと一緒で、とても生き生きとしている。子 どもたちは「明日何して遊ぼう?」とウキウキワクワク。保育教諭たちは、「明日子どもと何を楽しもうか?」と、子どもの振り返りの声と次の仕掛けにウキウキワクワク。前回、大学の先生に「共主体」の話を 聞いたが、今まさに共主体なのだと嬉しくなった。

保育教諭たちがたくさん保育を話し合うようになってきている。その中で、みんなでああだ、こうだといろいろなアイディアを出し明日に繋げている。真っ暗闇の長いトンネルだったが、ここにきてやっと一筋の光が見えてきている。保育教諭たちの園の改革が面白いという気持ちに寄り添って改革を進めていきたい。

少しは変わったのだろうか

学校改革マネジメントコース1年/玉ノ江こども園 荻原 慶子

4月に入学をして、10か月が過ぎようとしている。 月々のカンファレンスや、集中講座などで先生方や 学生の方と、話を聞いていただいたり、聞かせてもらったり話し合いの場をたくさんいただいた。心から 安心して話し合えるという贅沢な時間を頂いている にも関わらず、私自身は少しは変わったのだろうか、 と思ってしまう。

冬期集中講座の振り返りや、グループの皆さんと の話し合いの中で、感じたことを書いていきたい。

大学に通いだした当初は、「何かを始めないといけ ない」「現在していることをより深めなければいけな い」と形として残ることにこだわっていたように思 う。11月のカンファレンスの時に「園としてのビジ ョンは何か」「園長としてのビジョンは何か」と問い かけられた。恥ずかしい話だが、その時にすぐに答え られなかったのである。ファシリテーターの先生が 「どうして、大学院に入ろうと思ったのか」という問 いで、やっと答えることができ、「その答えが、荻原 さんのビジョンではないのかな」と言われてそうな のかとその時に初めて認識した。その時に感じたこ とが、とにかく動いてみるというのももちろん大切 である。しかし、「どうして動くのか」「何のために 動くのか」それを園全体で共有していなければ、混乱 を招くだけである。今、僅かではあるが、「こども達 が卒園する時には、どのように育ってほしいのか」 「こども達が、どのような大人になってほしいのか」 「そのために、私たちは何を大切にして保育をして いくのだろうか」その問いに対して、保育者が自分の 思いを話す、という時間を持つことが出来た。ここか ら、保育者が考えた園のビジョンが出来上がってい くといいのだが。そのためには、安心して話し合える 環境の保証が必要となる。

冬期集中講座で、よく出てきたワードが「心理的安全性の確保」であった。

心理的安全性とは、組織の中で自分の考えや気持ちを誰に対してでも安心して発言できる状態の事とある。これを見ると、まさしく教職大学院での話し合いでの場の状況である。

当園では、5,6名でのミーティングで、とても活発に話し合いが進むグループと話が進まず報告で終わってしまうグループがある。これは心理的安全性が確保されているか、されていないかの違いではないかと感じたと伝えたところ、研修の場でも同じような場面があるという話もお聞きした。どうして確保できないのだろうか。教員や保育者同士の中で「否定されるのではないか」「聞いてもらえないのではないか」「こんなことを聞くと馬鹿にされるのではないか」等の関係性であると心理的安全性は確保できないのではないかとなった。

さらに話を進めていくと、学校やこども園での、こども達の心理的安全性は確保できているのだろうかとなった。こども達が自分の考えや思いを安心して言える場が保証されているのだろうか。大人側からの定められた答えを求められて、こうでなければならないに縛られていないかとなり、自分事で考えると、こども達の思いや、職員の思いを大切にしていく事が重要であることは分かっていても、決められたレールに乗せようとしてしまう私がいるのではないかと思ってしまう。

安心してやりたいと思う事が出来る場、お互いが 対等に話し合える場が必要だと思う。乳幼児であれ ば、この保育者には受け入れてもらえるという安心 感が絶対に必要なのである。ただ、これは乳幼児だけ でなく、大人にとっても受け入れてもらえるという 安心感は必要である。

こども達が主体の保育、こども達の思いを大切に しながら保育をしていく事が求められているという 重要性は分かっているものの、どうすればいいのか 分からない、不安しかない、という声を保育者から聞 く。安心ではなく、不安なのである。これもただ、「子 ども主体の保育」を目指そうという言葉だけがあっ て、保育者みんなで何を「主体」というのか等の話し 合いを積み上げてこなかったからである。 令和6年度、「心理的安全性」をどのように確保するのか、どう伝えていくのか。それが出来てくると「こども達が主体的な保育」につながっていくように思う。少しずつ変わっていけるのだろうか。

焦らずに

学校改革マネジメントコース1年/同志社中学校 田畑 彰子

教職大学院での学びを始めてから10ヶ月が経過した。このままではいけない、勉強しなければならないと思い入学した大学院。毎月のカンファレンスや集中講義に参加し、様々な立場の方々と意見を交わすことを通じて、今までの価値観や教育観が変化しているように思える。

語ることが得意ではない私は、グループで話すことに最初戸惑った。4月の合同カンファレンスで「令和の日本型学校教育」の資料を読んだ。「主体的な学び」とは「学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる」とのこと。見通しって何?分からない単語も出てくる。その後のグループセッションで上手く伝えられないもどかしさを覚えた。みんなで語り合う場の空気、雰囲気を学びたくて、福井へ通うようにしている。グループセッションは、それぞれの実践を肯定的に受け止め、温かい雰囲気で進められていく。どんなときも安心できる場だ。それぞれの立場から感想や意見をもらえる。自分にない発想もあり、驚かされることもある。

「その授業を通じて、何を教えたいのか?」原点に 戻る質問をいただいたことがある。一瞬止まってし まった。自分の言葉で答えることで、こんなことを考 えていたのかという再認識ができる。カンファレン スで自分の実践を振り返り、語り、省察していく。他 の先生方の実践から、客観的に自分の実践を振り返 ることができ、ヒントを得て見通しを持つことがで き、次の実践につなげることができる。 夏期集中講座で読んだ『コミュニティ・オブ・プラクティス』では実践コミュニティについて学んだ。今まで手に取ることのなかった専門書で理論を学び、語り合ったのも刺激的だった。学校で、実践コミュニティを戦略的につくっていきたい。

また、カンファレンスを通じて、今まで目にいって いなかった幼稚園の姿をきくことによって、教育と は何か、現在だけでなく、広い視野で子どもたちをみ ていく必要があることを感じる。社会全体で関わっ ていくことの大切さも感じる。

学校では「校内研修」の充実に力を注いでいる。ボトムアップが必要、対話をするにはどうすればいいのか、と強く思っているところがあった。しかし、あーこれもできていない、これもできていないという気持ちでカンファレンスに参加していくうちに、トップダウンとボトムアップはバランスであるし、緩さがいるなぁと思えるようになってきた。いつも自分が求めているところに意見をいただけるのが面白い。常に「そこからどうしますか?」という問いをいただいている。考えることが止まることはない。今は、自分の中の軸を揺さぶられている。当たり前だと思っていたこと、経験からそう思っていることを、ひとつひとつ自分の中に理論づけている。

子どもの学びと教師の学びは相似形という言葉は 大学院でよく耳にする。チームで協働しながら「正解 のない問い」に取り組む力をつけている。じっくり体 感している。対話していくことで協働がうまれる。同 じことが自分の学校でもできたらといいなと思う。 仲間を大切に、自分をしっかりとみつめながら、進ん でいきたい。焦らず、一歩ずつ。

長期実践研究報告を綴る中で見えてくるもの

学校改革マネジメントコース2年/和田こども園 青山 憲枝

教職大学院で学ばせていただき、長期実践研究報告執筆の真っ只中にいる私が、それを書き綴る中で 省察していることを、ここに記したい。

私の長期実践研究報告は、幼い頃からの夢をかなえて保育教諭になったはずなのに、楽しいと思えない、こんなはずではなかったという葛藤から始まる。さらっと流した章だったが、執筆を指導していただいている宮本先生との対話を通して、当時の私は、小学校の頃に大好きだった先生がいつも笑っていて、教師という仕事に就けば楽しい人生を送ることができるような気がしたことを思い出した。しかし、子どもの頃に描いた理想と、就職後の現実との違いに辟易し、出産を機に退職の道を選んだ。

我が子の通った保育園での生活を通して、私が子どもたちと関わる中で何を育てていきたいのかが明確になり、再び保育教諭として再就職する。そのくだりでも宮本先生は、「なぜ、再び和田こども園に就職したのか?」と問われた。私の長期実践研究報告では、「副園長から、そろそろ戻ってこない?と声をかけてもらったため」と綴っていた。なぜ、二度と戻るつもりはないとまで思った保育現場に、しかも再び和田こども園に戻ったのか。私はそこでも、深い省察をしなくてはならなかった。

和田こども園に、新たな希望を抱えて再就職したものの、組織・伝統・保育のやり方に抗えない自分の無力さを痛感した。『これが普通』という枠の中に入ることで器用に、楽に生きようとした。しかし、娘の不登校という壁にぶつかり、『普通って何?』を疑い始める。自分の保育のやり方に生きづらさを感じている子がいるのではないかという問いが生まれる。私が『普通』と思っている枠を柔軟にしようという実践につながっていく。私のターニングポイントだったことにも気付いた。

ただ、そのような私の保育に賛同し、協働実践して くれる仲間がいる一方で、これまでの『普通ではない』 やり方に疑問を持つ同僚がいるのも当然のことだった。教育・保育はどこに向かうのか、漠然と進むのではなくきちんと勉強したいと思い、教職大学院に入学した。そこから2年間、新たな学びの形を知る中で、学ぶことの楽しさや意味、価値を堪能した。

50年以上続いてきた自園の「生活発表会」が、今 年度「わだフェス」という形に変わった。これまでは、 子どもたちに毎日練習させて完成度の高い演目を保 護者に見てもらうというものであったが、あそびの 通過点をみてもらうという主旨に変わった。役も台 詞も決めない。今日、自分が演じたい役で、自分の言 葉で話す。教職大学院に入学してからの私が、合同力 ンファレンスを通して、対話の中に深い学びがある ことを経験したことで、担任チームや子どもたちに も対話する力を意識的に育ててきた。この劇あそび で、幼い子どもであっても自分の意見を持ち、他者の 意見を聞き、折り合いをつけられるという成長を保 護者に見てもらいたかった。例えばその先に、間違い や失敗があったとしても、そこからまた協働の試行 錯誤が始まるのだということを伝えたかった。宮本 先生は、「この演目には、子どもたちにも先生たちに も様々な葛藤がある」とおっしゃった。葛藤させない ようにお膳立てしていくのではなく、葛藤を濫立さ せていくことが大事であり、そこに深い学びがある ということだった。そして気付いた。私は、幼い頃か らの夢だった保育教諭という職に就いてから今に至 るまで、ずっと葛藤していることに。

長期実践研究報告を綴ることは、自分の保育教諭 人生を振り返ることだった。長い道のりを書き綴る 中で、思い出すのはその時の葛藤であった。苦悩しも がき実践につながったこともあれば、当時の状況や 自身の未熟さから長いものに巻かれるしかなかった ことにも気付いていった。ここまで、私が一歩ずつ前 に進んで来られたのは、葛藤があったからなのだと 感じる。葛藤があったからこそ教職大学院で学びた いと思った。そして、学びの深まりとともに、その葛 藤は消えるどころか増えていくことにも気付いた。 しかし、宮本先生の言葉で、それでいいのだと肯定された気がした。私の葛藤、同僚の葛藤、子どもたちの葛藤、それらの様々な葛藤は、これからも続くであろう道のりを歩いていく原動力となっていくのだということを、長期実践研究報告を綴る中で気付く。大学 院を卒業したとて、長期実践研究報告を書き終えたとて、それで終了ではない。私の前には未だ様々な葛藤が濫立している。しかし、ここまで歩いてきたということは、葛藤しながらも越えられなかった壁はなかったということだ。前向きな気持ちを支えに、私は今、長期実践研究報告の執筆と闘っている。



冬期集中講座報告

学びを"次に繋げる"

授業研究・教職専門性開発コース3年/福井市至民中学校

魚見 晏那

2024年1月下旬の現在、長期実践研究報告書(以下、報告書とする)を執筆している真っ最中である。 昨年度、同期がこの時期に頑張っていた姿を見ていた時から、早1年が経とうとしている。3年間長かったようで短かった教職大学院での学びは、もうすぐ完結しようとしている。自分の学びを完結させるためにも、この冬期集中講義での学びは大きかったと感じている。

この報告書を執筆する上で、私が目的にしていたのが、"次に繋げる"であった。それはどういうことかというと、2つの意味がある。まず、私が執筆することで今後の自分に繋がるということである。3年間の学びの中でのさまざまな実践や経験を捉え直すことで、課題や学びを見出して自分の今後の学びに繋げることができる。2つ目は、私の報告書を読むことによって、その誰かの学びに繋がってほしいという意味である。私が学んだ記録を残しておくことで、読んでくれた人の経験に重なったり、ヒントになったりするなどその人の学びに繋がってくれると嬉しいという意味で"次に繋げる"という目的でこの報告書を執筆していった。

冬期集中講義では、ひたすら記録を書き進める時 間と書き進めたことをグループで話して深めていく 時間の2つの時間で構成されており、自分の書きた い理想のものに近づけていく。私にとって、話して深 める時間が自分の報告書をより良いものにするヒン トになったと考える。というのも、書き進める中で感 じた悩みや疑問を解決するヒントになるだけでなく、 私 1 人では見えていなかった視点を得ることができ る。実際に冬期集中講義の cycle2 のグループで自分 にはなかった視点を得ることができた。Cycle2で執 筆していた金曜カンファレンス(以下、金カンとする) の学びについて紹介した時に、同じグループの水野 先生から「金カンの行う意味ってなんだと思う?」と お話があった。私が考えていたようで、考えていなか ったことだった。3年間にわたって関わってきた金カ ンの学びを基に、自分が考える"金カンを行う意味" を書き残しておくことで、もし金カンについて悩ん だ人にこの報告書を読んでもらうことで役に立つも のになってくれると、自分が掲げた目的に繋がる。私 だけの視点では考えられなかった視点だった。そし て、その質問を受けて私が考え、話し合っているうち

に考えがまとまっていき、報告書で書きたいことが 明確になっていった。話し合いを通して、自分の学び を違う視点から捉えるだけでなく、考えを整理して いくことができる。教職大学院入学当時、話すことに 苦手意識を抱いていた自分にとっては考えられない だろう。この3年間の学びは自分を変える大きなき っかけとなったと思う。そして、私がこの報告書を書 くことによって、自分自身の3年間の学びを捉え返 すことができた。自分が何を学んできたか、何が課題 として出てきたか、何を自分は目指すべきかなど…。 捉え返して出てきたものをこれからどう繋げていく かが大切になると考える。

私が報告書執筆の目的に掲げた"次に繋げる"を実 現させるためにも、2月の報告会での学びを活かして より良いものを作り上げたい。

「問い」をもとに省察する

ミドルリーダー養成コース1年(1年履修)/福井大学教育学部附属義務教育学校後期課程

河合 創

冬の集中講座の6日間は、長期実践報告の執筆の 時間。ただひたすら書き続ける6日間でした。人生の 中で、これだけ文章を書き続けた経験はありません。 論文や、何かの書籍や雑誌の原稿、学校の研究紀要な どを書く際も、せいぜい 10 数ページ程度。それも、 短期的で具体的な実践について書くことがほとんど だったので、この長期実践報告のように、非常に長い 期間を振り返り、それぞれの実践を省察し直しなが ら、それぞれの価値を捉え、ストーリーを描いていく という試みは、頂上の見えない山の麓に立つような 気持ちでした。

長期実践報告を書き始める際に、どんなテーマで 書くのかを悩みました。授業、生徒指導、学級経営、 特別活動、研究、学校外のコミュニティなど、これま で取り組んできたことの何に焦点を当て、どのよう な視点で書いていくのか。非常に高く険しい山に登 ろうとしているので、その登山ルートを決めること が、最初の壁でした。そうは言っても書き始めなけれ ばならないので、私は3つのテーマに絞ることにし ました。それは、「英語教育」「中学校教師としての 子どもとの関わり」「教師コミュニティ」の3つです。

1つ目の「英語教育」については、最も重点的に語 り直していきたいテーマでした。それは、私の教職人 生を振り返った時に、何を一番意識して取り組んで きたかと問われれば、「授業」と答えるからです。教 師としては、当たり前のことではありますが、子ども が学校に来て最も長く時間を過ごす、授業という時 間を有意義な学びのある時間にしたいという思いが ありました。

2つ目の「子どもとの関わり」については、私が「迷 い続けていること」であることが、設定の理由です。 若い時には若い時なりの子どもとの関わり方を悩ん できましたが、その悩みはいつか経験を積めば無く なるだろうと楽観的な気持ちでいたこともありまし た。しかし、経験を積めば積むほど、新たな課題が見 えてきます。例えば、若い時には、どのように子ども と信頼関係を築くことができるのかというのが主な 関心事でした。もちろん今でもその答えが明確に出 ているわけではありませんが、今はどちらかといえ ば、子どもが主体的に学んでいく過程をどう支えら れるかということに関心が向いています。

3つ目の「教師コミュニティ」については、中堅と 呼ばれる年代に入った頃から意識するようになった ことです。若い時は、全部自分でやれば良いと思って いました。難しい課題も、自分ができるようになれば 解決すると信じていました。しかし、職場で「主任」

とつくような仕事をするようになってから、そうもいかなくなりました。自分一人が息を巻いても空回りするだけです。一時期は、さらに自分が頑張れば何とかなると考えてもいました。それでは、組織や集団、コミュニティの成長は望めず、自分にも学びが少ないということを最近強く感じるようになってきました。

これらの3つのテーマをもとに、初任時代からの 実践を省察し、その意味を探っていくことにしました。ただ、時系列で振り返りながら、3つのテーマについて語っていくということが難しい。そこで、章立てをする際、すべての項目のタイトルを「問い」という形にすることにしました。例えば、「文法をちゃんと教えてほしい!どう答える?」「どこまで子どもに任せるの?」「他教科からの学びとは?」などである。このような形で、長期実践を書くことにしたのは、実践を振り返る中で、常に何かしらの問いと向き合ってきたことに気づいたからです。その実践の当時は、「問い」として言語化できない、もやもやとした悩みのようなものも多々あったと思います。そのような 問いに、今一度実践をもとに答えていくプロセスの中で、自分がそれぞれのフェーズで、何をどう考え、学んできたのかを捉え直していきたい。そして、その省察が、今後の展望を語っていくのに重要なプロセスになるのではないかと考えました。

章立てをしてみて、問いを並べてみると、時間の経 過や経験とともに問いの質が変わってきていること に気づきます。執筆をしていると、問いそのものを書 き直すこともありました。

険しく長い登山は、到底6日間では終わりませんでした。このニュースレターの原稿を書いている現在、まだ長期実践の執筆は終わっていません。ですが、ようやく山の頂が見えてきたようにも思います。登った先に、またさらに上の頂が見える気がしてなりませんが、そのことには目を伏せて、何とかこの長いプロセスに区切りをつけていきたいと思っています。

長期実践報告が仕上がった際には、私が向き合ってきた「問い」をもとに、いろいろな人と語り合えたら面白いなあと思っています。その時は、ぜひお付き合いいただければと思います。

有機的に繋がる学びと、学びの中核

ミドルリーダー養成コース2年/岐阜聖徳学園高等学校 水谷 雅典

12月23日~25日,1月5日~7日の6日間に渡り,教職大学院での2年間の学びを省察した。さらに,教職大学院で学ぶ前の自身の状況や思考についても省察をした。

集中講座では、自身の実践を省察しアウトプットする。ただ、自分で実践をとらえるだけでなく、共に学びを深めてくれる仲間の意見やアドバイスを包摂し、それらを足掛かりとしながら自身の実践を多面的に捉え直す。これにより、頭の中で点在していた自分の考えや実践のもつ意味が有機的に繋がり整理され、構造化されていくような気がした。私自身では捉えきれていない価値や不足している側面を、共に学

ぶ仲間が何度も気が付かせてくれた。また,これまで 読んだ書籍や長期実践研究報告をもとに,自身の実 践を捉え直す等,実際に顔を合わせていない方々か らも多くの学びを得ることができた。

さて、私が教職大学院における学びのミッションとして認識していたのは探究の推進である。探究的な学びを推進することで、多様化する大学入学者選抜に柔軟に対応し、生徒の進路実現をサポートすることを求められていた。また、生徒激減期を迎える中でも、私立学校である本校が力強く生き残っていくためには魅力ある学校づくりをすることは重要なこ

とであり,新学習指導要領の主旨を踏まえると探究 が妥当であると考えていた。

私の実践はスローテンポであったが、約2年間に渡って自身のクラスで探究を継続的に行い、校内においても探究が進むように計画を立てたり情報を発信したりしてきた。ただ、授業(教科や総合)であっても校内探究であっても、実践の最中は、実践間の繋がりや、繋がりの中でこそもつ意味・価値は見えにくく、それぞれの実践が点と点の状態であった。そのような状態で冬の集中講座を迎えた。

集中講座の6日間を通じて自身の実践をじっくりと捉え直すと、各実践が個別にもつ意味や価値に気が付くだけでなく、仲間と共に学びを深める中で、自分では見えにくい側面や価値があることに気付かされた。それらによって実践の点と点が有機的に繋がり、実践間から捉えるような学びの時間となった。実践が個別に存在するのではなく、複雑に絡み合う実践間同士の関係を考える中で、2年間に渡る実践の中核が見え、学びの全体像が浮かび上がった。

私の教職大学院での学びのミッションは探究の推 進であったため、冬の集中講座で長期実践研究報告 を執筆する中で、何のために探究を推進しようとし ていたのか、何のために探究をするのかを何度も自 問自答した。特にこの2年間を振り返ると、形だけの 探究に囚われている瞬間も少なくなかったことに気 付かされたし、探究をすること自体が目的となって いた実践もあったことに気付かされた。それだけで なく、生徒の探究をサポートしているつもりであっ ても、寧ろ逆のことをしていたこともあったことに 気付かされた。ただ、自問自答を繰り返し、実践間のつながりや、複数の実践から共通することを省察すると、自身の2年間の実践の中核は「資質・能力の育成を基盤(中核・土台)とした実践」であったと分かった。つまり、資質・能力を育成するための授業改革(教科や総合的な探究の時間、教科と総合の横断)であり、資質・能力を育成するための校内における探究の推進であった。

冬の集中講座で長期実践研究報告を執筆していると、たくさんの先生方の支えによって日々実践をすることができていることにも気付かされた。毎月あるカンファレンスや、定期的に開催されるラウンドテーブル等で、様々な方と学び合うことができたからこそ、日々挑戦と失敗を繰り返すことができたと感じている。失敗から立ち直ったり、行き詰まった実践から新たな切り口を見つけるとき、教職大学院での語り合いの時間は大きな影響を及ぼしていた。さらに、他の先生の学びを聴き、自分の学びを話すことで、実践を通じて繋がる仲間もできていたことに気が付いた。

冬の集中講座を終え、教職大学院での学びは一旦 区切りを迎えようとしている。ただ、これからも学校 内外の様々なコミュニティに属し、階層化・分断化さ れた現代社会で生きる生徒に対し、どのような資質・ 能力が必要かを思考することは続く。VUCA 時代の地 域・日本・世界の明日を切り開く生徒に期待すると同 時に、彼らの成長を支える私たちの実践にも終わり はない。

冬期集中講座の振り返り

ジルリーダー養成コース2年/東京学芸大学附属高等学校 千葉 美奈子

2年目の冬期集中講座は、柳澤先生より実践の取り組みを吟味する重要性についてお話があった。実践を振り返り、一度書いたものを何度も吟味し直すことは今までの月間レポートではそれほどしていなかったように思える。実際に書いたものを一度見直

したときと、2回目見直した時では、その出来事に対して新たな見方が見えてきて、それを書き加え、修正するという作業を行った。そして、3度目、4度目と読み直すにつれ、その実践と今の実践とのつながりが見えてくるようになった。自分の価値はどこにあ

ったのか。書いてみて、やっと5度目ぐらいで、実践 の価値づけと長期視点に立った見方が徐々に出来て いるように見えてきたように思える。

東京サテライト校の福島先生は、長期実践報告書を書くとき、実践を取り巻く、「ひと、もの、こと」について書く必要性を伝えて下さった。私の場合は、実践の中で取り巻く「ひと」が主に書かれていて、それを取り巻く「もの、こと」がほとんど書けていなかった。「ひと」の背景には、必ず「もの、こと」がある。何度か読み直すと、「もの、こと」の部分を思い出したり、疑問に思ったりして、自ら調べはじめた。そうすることで、気が付けば、今まで見えていた実践とは大分違う実践の見方をしていた。つまり、実践の捉え直し始めていたのだ。この作業こそ、教師としてのものの見方・考え方につながっていき、まさしく自分にとっては必要なことだったのだ。

実はこの長期実践報告書を書き進むうえで、家庭や学校で思いもよらない出来事が次から次へと起こった。もはや長期実践を書くような状況でもない中での冬期集中の参加となった。はじめは、同じグループの方々には、申し訳ない気持ちでいっぱいだったが、同じ仲間として、数々の応援と励ましのお言葉をいただき、最終日には、やれるだけのことはやろうという気持ちになることができた。

この記事を書きながら、ふとフランスの画家、ポール・ゴーギャンの傑作「我々はどこから来たのか我々は何者か我々はどこへ行くのか」(D'où venonsnous? Que sommes-nous? Où allons-nous?)を思い出した。この作品は、ゴーギャンは様々な困難があった後制作されたもので、自身が描きたいものを描ききった作品となっている。彼の苦労とはくらべものにはならないが、私も書きたいことを書ききる気持ちで残り数日間、長期実践報告書作成に挑みたい。

自分自身と向き合う中で

学校改革マネジメントコース1年(1年履修)/おおい町立本郷小学校 高橋 和代

令和5年4月に入学した教職大学院での学びも、 もうすぐ終わりを迎えようとしている。組織マネジメントに関する学びは、令和3年度の県マネジメント研修からスタートしているものの、実際に大学に 足を運んだのは今年度からということもあり、修了 することに寂しさを感じている。

このニュースレターを書いているのは、1月20日である。長期実践研究報告の締め切りまで日はないが、完成までにはもう少し自分自身と向き合わなくてはいけない状況である。長期実践研究報告の執筆に関しては、なるべく早くから取りかかることを目標にしていたが、11月はインフルエンザに感染したり、家庭や仕事のことでバタバタしたりしているうちに、あっという間に12月23日の冬期集中講座の日を迎えてしまった。

冬期集中講座の際、小林真由美先生が「苦しんで書 かれたことには意味がある。書いている間に自分が 成長してくる。書くことは苦しいけれど、苦しかった ことが自分の成長の一歩になる。」とおっしゃられた が、冬期集中講座の6日間のなんと苦しかったこと か。執筆のために、カンファレンスの記録以外にも、 実践したことを意識して記録として残してあったも のの、実際に書き進めようと思うと、「過去の自分」 と「現在進行形の自分」が混在してしまった。過去の 自分が大事にしていたことと、今の自分が大事にし ていることの違いを、どう言葉で表現したら良いの か、どうストーリーとして捉えればよいのか、その難 しさを感じた。冬期集中講座の6日間、そして年末年 始は、帰省した家族が寝静まってからパソコンの前 で頭を抱えた。しかし、結局書き進めているだけで、 ストーリーとして展開されているとは言い難い状態 であった。

そのような状況を脱し、ようやく1歩前進できたと感じられたのは、3学期が始まり、子供たちや同僚の姿を目の前にしてからであった。冬期集中講座で悩み苦しんで書いたことと、目の前の子供たち・同僚とが合致し、点と点が1本の稜線になってきつつあると感じられるようになった。通常の業務が始まっていたので大変だったが、仕事から帰宅して毎晩少しずつ書き進め、次の日の朝、25分間の通勤の車での中で、今までの取り組んできたことに思いを巡らす、そんな毎日を過ごすことで、少しずつ自分が大事にしたいと思ってきたことが、言葉で表現できるようになってきた。

冬期集中講座で柳澤先生がおっしゃった「取り組んできたことを吟味し直す時間が、大切で価値ある時間である。山登りに立ちえると、先に進む中で後か

ら見えてくることや、後になって初めて意味がわかってくることがある。」という言葉が、この時になって初めて実感できた。この実感こそが、私にとって大変貴重で、尊い経験である。また、書くことを通して「その時の自分はどんな迷いや葛藤があって、どういう心の動きがあったのか」と、自分の考えを考え抜いたという経験も、きっと未来に向かうこれからの私のベースになるであろう。

長期実践研究報告の執筆が終えたら、次は 2/4 の 長期実践研究報告会、2月17,18日には実践研究ラウンドテーブルである。共に学んできたみなさんと、互いの実践を語り合いながら学び合えると思うとワクワクする。その学びを通して、どんな自分に出会えるのかも楽しみである。

これまでの学びをまとめるということ

学校改革マネジメントコース1年(1年履修)/坂井市立三国南小学校 高橋 正晃

今回の冬期集中講座の6日間は、これまでの自分 自身の実践と学びを「長期実践研究報告」としてまと める期間であった。とは言っても、たった6日間では すべてをまとめ切れるわけもなく、昨年度の事前履 修も含めてこの約1年半の間に、少しずつ書き記し ておいた「記録」をもとに書き著していった。

私に関して言うと、昨年度の夏期集中講座にて、これまでの私自身の教員生活をふり返るところからスタートした。正直これまでの26年間、自分の足跡を見つめ直すことなんて一度たりともなかった。確かにいくつかの実践の途中で、短期的に振り返ったり省察したりということはあった。しかし、20年以上もの長期にわたってふり返ることは初めてだ。そのせいもあってか、自分自身についてこれまで見えなかったことに改めて気付いた。それも一つや二つではない。これまで、自分のことをこんなにも分かっていなかったのか、と驚くほどだった。

全くの経験がないまま飛び込んだ教員の世界。当 時は、教育実習でしか学校現場に携わったことがな かったので、実際に教壇に立つようになって、正直面 食らった。授業をしても、ざわついて授業にならない。 学級経営においても、自分が思うように子供が動か ない。反抗的な生徒まで現れる。部活動においては、 自分の専門競技でないため、指導方法すら分からず、 当然指導が通らない。

ただ、その都度、周りの先生方からいろいろなことを教わり、自分でも学びを広げて深め、対応しようとしてきた。そうすることによって、自分の欠点や改善点が見え、どうすればよいかという対策方法を見出すことができた。

その後も、異動により勤務校が変わったり、校種が変わったりするたびに、同じように様々な壁にぶつかった。努力してみてもうまくいかず、悩んだこと、苦しかったこともたくさんあった。しかし、いつも多くの先生方、地域の方、時には子供たちの力を借りることで助けてもらった。

このように、これまでの自分自身の歩んできた道をふり返ってみると、ある共通項が見えてきた。一つ目は、うまくいかなくて苦しい経験をした時こそが、ステップアップのチャンスだということである。もちろん、ただ何もしないでいるだけでは決して好転しないが、うまくいかないからこそ、何とかしようともがき苦しみ、何とか活路を見出そうと努力する。そうすることで、いろいろなことを学び、知らず知らずのうちにスキルアップが図られているのだと思う。少なくとも私はそうだった。まさしく「ピンチこそチャンス」である。思い返してみると、これまでもそのようなターニングポイントがいくつもあった。おそらく今後も幾多の困難が待ち受けていると思う。しかし、その時こそがターニングポイントであることを忘れずに、あきらめずに挑戦していきたい。

二つ目は、実践を進めるためには、また逆境を乗り 越えるためには、自分一人の力では非常に困難であ り、周りの人との協働が必要不可欠であるというこ とだ。私自身、これまでいくつかの実践を行ってきた が、自分一人の力で成しえたことなど一つもない。同 じ職場、時には他校の先生方とともに知恵を出し合 い、情報や意見を交換し、そして一緒に実践してきた。 逆に、他の先生方の実践に参画した時も同様だ。教師 だけではない。地域のコミュニティーセンターや企 業、勤務校のOBの方々とも協働を図った。「子供の 学びと教師の学びは相似形」ともいわれるが、もちろ ん子供たちの活動においても協働的な学びの場を大 切にしてきたつもりだ。どのような実践においても 大人も子供も、一人では非常に難しい。個別最適な学 びももちろん大切だが、協働的な学びも主体的で深 い学びを実現できると私は思う。

そして三つ目は、いかなる教育活動においても、子供も教師も学び、成長しているということだ。課題を解決するためのいろいろな知識や手段、プロセスを学んでいるのは、決して子供たちだけではない。子供たちの学ぼうとする意欲を導き、様子や変化を見取り、その後の可能性を広げるという教師の役割を果たしながら、実は教師もたくさんのことを学んでいるのだ。そしてそのような学びこそが、お互いを成長させているように思われる。

これまでの学びをまとめるということは、すなわち新たな学びをスタートさせるということだと私は考える。ICTの発展に負けないくらい変化の激しい現在の教育。これからどのような学びが必要となってくるかを見極め、さらに実践を深めていくことがわれわれ教師の使命であり、その使命を果たせるよう今後も精一杯努めていきたい。

冬期集中講座に臨む

学校改革マネジメントコース1年/座間市立相摸野小学校 川田 奈津子

12月23日24日25日の3日間の冬期集中講座を受講した。東京サテライトはいつもより少し人数が少なかった。まだ学校が休みに入っていないという方もいるようだった。しかし、私は前日の22日が2学期の終業式だったので、この冬期集中講座の3日間は集中することができた。

初めての夏期集中講座ではどんなことをするのか ワクワクした思いで受講していた。いくつかの書籍 を読み、自分の経験を重ね、省察していた。同じ本を 読んでも読む視点や捉え方のちがい、そこから思い 浮かべる経験のちがいを交流することで自分自身の 読みの深まりや省察する経験の広がりを感じていた。 とても充実した時間を過ごすことができた。しかし、 Cycle3 の最後にそれまで記録していた原稿が消えて しまったことがあった。その原稿を探すことはもち ろんだが、原稿に記した文章を思い出そうとしたと き、私は何を省察しようとしていたのか、なぜその事 例が思い浮かんだのか、わからなくなっていた。そし て一つ一つの書籍とセットになった省察した事例の つながりが見えないことが、とても気になっていた。 省察する目的が見えなくなっていた。

11 月に東京サテライトの研究室に長期実践報告を 借りにいった。書籍や自身の経験からの省察をどの ようにテーマとつないでいるのか、その思考のプロ セスを知りたくなったからだ。ひとつの実践を省察 によってブラッシュアップさせながら実践する事例 とともに、著者の大切にしようとする信念が少しず つ表面化されていくプロセスはとても興味深かった。 私のプロセスはまだわからないが、次につながる省 察をしたいものだと考えた。そこで、今回の冬期集中 は次の3つの実践(1)学校保健委員会(2)ブロック会 議(3) 共生 の省察を決めて臨むことにした。夏期の 時とはちがったワクワク感だった。記録をそろえて、 構成もイメージしていた。(1) は実践事例(過去) (2) は継続事例(現在)(3) は実践するための省察 (未来)であり、この省察のちがいによって、何を感 じるのか楽しみだった。

(1) 学校保健委員会

教職員、保護者、児童、学校医、学校薬剤師で構成する学校保健委員会で参加者が自分事として健康について考えられる場にしていきたいと、それまでの児童の発表、校医による講話から、対話を中心とした活動に変更した。教師がファシリテーターとして進行した。それまで発表する委員会の児童と質問や感想を述べる数人しか発言していなかったが今回グループにしたことで全員が発言した。また、多様なグループのメンバー構成により、新たな気づきにつながり、自分や家族の生活について考える場になっていた。

(2) ブロック会議

各学年、特別支援学級担任、教科専任教諭等学校の 多様なメンバーで構成し協議するブロック会議は重 要である。特に今回は学校評価を受けて次年度に向 けての方向性を話し合う大切な会議だった。主催す る私は参加者の先生方から多様な意見を引き出した いと考え、プログラムデザインを作成し、準備してい た。しかし結果は思うようにうまくいかなかった。限 られた時間の中で、議案の多さや主催者側の連携不 足、ファシリテーターとしての力不足等課題が多く 見つかった。今回の学びを生かして、内容の精査およ び間いかけ等授業をデザインするように 次回の会 議をデザインしていきたい。

(3) 共生

- (1)と(2)は実践に対しての省察だった。しかし、
- (3) はこれから実践しようと考えるための省察だった。社会の枠組みの中で考える共生、学校の枠組みの中で考える共生があり、それまでの自分の経験の中で意図していたもの、意図せずに行っていたものを省察し、次の自分の実践につなげていくためのデザインを作りたいと考えていた。

冬期集中講座では(1)と(2)を整理することで終わってしまった。夏期ではもてなかった前に進むイメージが冬期ではもてたことは、よかったと思う。また、今回の内容の記録(写真やアンケートの結果等)を私は準備して臨んでいたが、同じグループの先生も写真や動画を持ってきていて、お昼休みに見せていただきながら当時の生徒の様子やご自身の姿を語っていたことがとても印象的だった。記録が写真や動画で残っていることも省察するうえでは有効的だと思い今後の自分の実践の記録の残し方の参考にしていきたいと思った。この3日間はM2に向けてとても大切な学びにつながっていくと感じている。



事務連絡

実践研究福井ラウンドテーブル 2024 Spring Sessions のお知らせ



For Communities of Practice and Reflection, since 2001

実践研究 福井ラウンドテーブル 2024 Spring sessions

17(sat) 8:40-17:40 18(sun) 8:20-14:00 福井大学総合研究棟V (教育系1号館) 総合研究棟 online-offline hybrid sessions with Zoom



探究する学びを実現する教師 教師の実践力を培う学校拠点 教師を支える教職大学院の実践研究

> 学校と大学/ 実践と研究を結ぶ 新しい実践研究組織とそのネットワーク

2024.2.17-18

福井大学連合教職大学院·総合教職開発本部 福井大学大学院 福井大学·奈良女子大学·岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科 後援 福井県教育委員会

online-offline hybrid sessions with Zoom

実践研究 福井ラウンドテーブル 2024 Spring sessions

The 24th anniversary year of Round Table Cross Session in University of Fukui since 2001

2/17(sat) 8:40-17:40 (zoom 接続開始 8:10)

Session I 教職大学院改革特別フォーラム 8:40-11:00

「新たな教師の学び」を支える協働のために 学び合うコミュニティを多重に編成する研修サイクル

Poster Session I ポスターセッション 11:20-12:20-大学生・社会人- (Zoom 接続開始 11:00) Poster Session II ポスターセッション 13:10-14:10 -児童・生徒- (Zoom 接続開始 12:50)

Session II

学校・教育・地域を考える6つのアプローチ 14:30-17:40

- A 学校:子ども主体の学びを実践するコミュニティ
- B 教師教育:学び合う学校づくりのための組織・コミュニティの醸成
- C コミュニティ: 持続可能なコミュニティをコーディネートする -世代や立場を超えたつながりの広がりは、どのようにして実現してきたのか-
- D International: International Initiatives on Collaborative Learning
- E 探究: 学(まな)びと教(おし)えのあたらしいすがたカタチをみんなで考える
- F インクルーシブ: 「個」の視点から教育を再考する-子どもと教師の接面を探る-

2/18(sun) 8:20-14:00

Session III Round Table Cross Sessions

実践の長い道行きを語り 展開を支える営みを聞き取る

①はじめに8:20-8:40 ②自己紹介8:40-9:00 ③報告Ⅰ9:00-10:40 ④報告Ⅱ10:40-11:40 ⑤報告Ⅲ12:20-14:00

地域や職場で自分たちの実践をじっくり跡づけ、その省察をふまえて実践を編み直していく。 地域・職場を大人同士が実践を通して学び合う協働体(コミュニティ)に変えていく。その中で 一人一人が、省察的で主体的な実践者としての力を培っていく。そうした地道な取り組みが少し ずつ蓄積されてきています。

試行錯誤を重ねながら大切に進められてきているそうした取り組みを、より広く伝え合い、じっ くり展開を聞き取り、学び合う場を作りたいと思います。

小グループで実践の展開を聴き合います。

実践記録を土台に実践の歩みをじっくり語っていきたいと思います。心に残っている場面。 言葉、表情、行為。その時々に感じていたこと。ふりかえる中で見えてきたつながり。話し 合いと記録づくりの中ではじめて気づいたこと。いま改めて跡づけ直して考えていること。 語られる展開に耳を傾け、活動の場面を共有し成長のプロセスを探っていきたいと思います。 実践の過程をじっくり語り・聞きあう場、実践を共有して協働探究できる関係がより広く培わ れていくことが、その後の実践への問いの深まりを支える拠り所になると思います。

- ●参加申し込みが必要です。ホームページの申し込みフォームからお願いいたします。 次の URL からも申し込み可能です。https://forms.gle/QWjYTatX3nEbaFML6
- ●2/18 の sessionⅢの実践報告者を募集しています。申し込みフォームで選択ください。
- ●2/18 の session皿の参加についてのお願い=午前午後全日程 (8:20-14:00) の参加をお願いします。 ラウンドテーブルでは少人数で互いの実践の長い展開を聴き合い、考え合うことを目的としています。 そのため 8:20-14:00 の全日程を 6 人程度の固定メンバーの小グループでの協働探究として進めます。 原則として 8:20-14:00 の全日程に参加できるメンバーで進めますので、よろしくお願いいたします。 プログラムの変更等があり得ます。

最新の情報を福井大学連合教職大学院ホームページ http://www.fu-edu.net/をご確認ください。

実践研究福井ラウンドテーブル spring sessions 2024.2.17-18

2024年1月29日更新

実践研究福井ラウンドテーブル 2024 Spring Sessions

Keynote Session 教職大学院改革フォーラム

2024年2月17日 (土) 8:40-11:00 オンライン (Zoom 使用)

「新たな教師の学び」を支える協働のために(5)

学び合うコミュニティを多重に編成する研修サイクル

園と市町と県・大学がつながる福井の幼児教育研修を事例に

2022 年 12 月 19 日の中央教育審議会から出された『「令和の日本型学校教育」を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について~「新たな教師の学びの姿」の実現と、多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成~(答申)』では、「新たな教師の学びの姿」として、子供たちの学び(授業観・学習観)とともに教師自身の学び(研修観)も転換し、教師にも「主体的・対話的で深い学び」が求められることが改めて確認された。この研修観の転換に向けては、文科省で予算措置(令和 4 年度教員研修高度化推進支援事業)もなされるようになり、具体的な条件整備も進んでいる。

本フォーラムではこれまで、理論と実践の往還・融合、教員免許更新制廃止後の研修改革、教員養成フラッグシップ大学構想、学校における学び合うコミュニティの展開、協働探究型研修の創造・展開といった点から教師教育改革の展望を共有してきた中、今回は、施設類型(幼稚園、保育所、認定こども園)をまたいで保育者が学び合うコミュニティを多重に組織している福井県の幼児教育研修システムを事例に、「新たな教師の学び」を支える協働のあり方に迫ってみたい。

趣旨説明

報告1: 4つの園のコミュニティを結び、保育者の学び合いを支える

高浜町立認定こども園・保育所 実践研究グループ びっか

報告2: 市町のコミュニティを培う県の研修のデザインとサイクル

福井県教育庁 義務教育課長 三崎 光昭

報告3: 分散型コミュニティの多重構造を支える

福井大学大学院連合教職開発研究科 教授 岸野 麻衣

コメント

独立行政法人 教職員支援機構 審議役/次世代型教職員研修開発センター長 佐野 壽則

他 (調整中)

省察と展望 福井大学大学院連合教職開発研究科 教授 柳沢 昌一

〈コーディネーター〉 福井大学大学院連合教職開発研究科 准教授 遠藤 貴広

ZoneA 学校

テーマ:子ども主体の学びを実践するコミュニティ

ZoneAのテーマは「子ども主体の学びを実践するコミュニティ」です。学校は今や、教 師だけでつくりあげていくものではありません。地域や保護者、そして子どもたち自身が つくりあげていく、「チーム学校」としてのコミュニティが求められています。子どもを中 心におき、子どもを取り巻くあらゆる力や、子どもたち自身の学びの力を結集して学校を つくっていく。そうしたコミュニティの在り方を考える中で、教師の学びだけでなく、子 どもたちを取り巻くあらゆる学びの可能性について探究していきます。

今回のシンボジウムでは、公教育の第一歩である幼児教育における子どもたちの姿、さ らに成長した中学校での生徒たちの姿を、登壇者の方にあるがままに語っていただき、子 どもたち自身の学びの力、子どもたちを支える周りの大人たちの力によって、どのような コミュニティが生み出されていくのか、またそこで子どもたち、大人は何を学ぶのかを考 え合いたいと思います。

Orientation 14:30-14:40 オリエンテーション

会場 教育系 1 号館 2 階大 1 講義室

Session I 14:40-16:00

Symposiums 「子ども主体の学びを実践するコミュニティ」

<シンポジウム>

<シンポジスト>

14:40-15:00 越前市立認定こども園服間 玉村美幸園長 15:00-15:20 信州大学教育学部附属松本中学校 湯本哲教諭

全体討議 15:20-16:00 探究的な学習プロセスの中で、相互作用を通して子どもたち

> が学び合っていくストーリー、それを支える先生たちの組 織・コミュニティについて話題提供を踏まえて考えていきま

<休憩> 16:00-16:20

現状共有と明日への展望

Session II 16:20-17:40 会場は当日ご案内します

Cross-session Session I の議論に基づき、参加者それぞれのコミュニティ

> づくりの長い実践を共有し、新たな出会いと協働を編み込んで いきます。校種等をクロスした小グループ形式での対話を編み

込み、実践をデザインし、展望を生み出します。

Zone B 教師教育

学び合う学校づくりのための組織・コミュニティの醸成

今日の学校教育においては、変化の激しい時代の中で持続可能な社会の創り手となる子どもたちの資質・能力を育むため、主体的・対話的で深い学びの実現など、教育の質的転換・向上が大きな課題となっています。教師は主体的・継続的に学び、協働して力量を高めていきながら、互恵的に学び合い高め合う組織づくりにも一層取り組んでいく必要があるなど、学校は大きな変革の中にあります。また、学校、地域、大学、自治体をつないだ広いコミュニティの中で子どもと教師が共に学び合う学校組織の新しい在り方が求められています。

Zone B「教師教育」では、教師の主体的・対話的で深い学びを目指した校内/園内を含む多様な研修や協働研究の在り方について、展望を拓いていきます。今回は、先進的に改革に取り組んでいる学校などの多様な実践を共有し、校種を超えて学び合う学校づくりのための組織・コミュニティの醸成について共に考えていきたいと思います。多くの皆さまのご参加をお待ちしております。

なお、今回は対面・オンラインのハイブリッドで実施します。

Session I

14:30-14:40 Zone B オープニング [対面/オンラインのハイブリッド開催]

パネルディスカッション

14:40-15:00 実践報告1 (山形県立山形東高等学校 須貝英彦 校長)

15:00-15:20 実践報告 2 (鳴門市里浦小学校 武知将人 教頭)

休憩

15:30-15:50 実践報告3(岐阜市立草潤中学校 中今純一 教諭)

15:50-16:40 協議

<進行・コーディネータ>

福井大学附属義務教育学校 校長

福井大学連合教職大学院 教授

牧田 秀昭

自律的に学び続ける教師集団の校内研修の在り方について展望を拓いていきます。

Session II

16:50-17:40 フォーラム

実践報告を踏まえ、参加者それぞれが今後の取組にどのように生かし、つなげることができるか、小グループで協議します。

Zone C コミュニティ

持続可能なコミュニティをコーディネートする ~世代や立場を超えたつながりの広がりは、どのように実現してきたのか~

Zone C ではこれまで、「持続可能なコミュニティをコーディネートする」というテーマ のもと、地域の学習活動や地域課題の解決をめざす様々な活動の事例をわかちあい、対話 を通した探究を積み重ねてきました。その中で発見されてきたのは、「若者や外部の視点 を取り入れて、地域を活性化させていこうとする動き」、あるいは、「公民館主事の方、地 域の活性化に取り組んでいる方、地域と協働しながら教育活動を展開する教育関係者の方 などが幅広く集い、共に話しあう姿」でした。

前回は、中学生へのキャリア教育の出前授業を通して、地域の担い手づくりをめざして いる団体の活動や、地域の伝統と文化の継承と活性化についての事例報告を受け、地域へ の誇りや愛着を支え育むものが何なのかを探りました。

今回、Zone C では、小学校での探究学習が地域社会に継続的に力(元気)をもたらして きた事例を紹介していただきます。事例の中では、小学生が地域課題を解決する総合的な 学習の試みを発端として、その学びが中学校、高校へとつながっていく様子が語られます。 さらには、子どもたちの思いを支援し共に歩もうとするつながりの輪が地域や行政へと広 がり、地域社会にとっての大きな力となっていきます。このような「世代や立場を超えた つながりの広がり」は、どのように実現してきたのか、その継続的で発展的な過程にご注 目いただければと思います。

事例に耳を傾けた後は、感じたことや、想起したことなどをわかちあう対話の時間です。 私たちが、コミュニティの中でいかに学びあい成長するのか、あるいは、地域の一員とし ての自己有用感や誇りや愛着はいかに育まれるのか、その結果として持続可能なコミュニ ティはどのように実現していくのかなど、対話を楽しみつつ探っていきましょう。

14:30~14:40 趣旨説明 永谷彰啓

14:40~15:10 実践報告「ふるさと美浜元気プロジェクト」 平城 慶彦氏(美浜町立美浜中央小学校教諭)

コーディネーター:永谷彰啓

15:10~15:40 中学校・高等学校・行政・生徒の話 司会との話し合いの中で

行壽 浩司氏 (美浜町立美浜中学校教諭)

吉岡 弘和氏(福井県立美方高等学校教諭)

山本 知也氏 (美浜町まちづくり推進課)

生徒代表

全体ファシリテーター: 冨永良史

15:45~16:00 休憩 (チャットタイム)

16:00~16:50 小グループでの話し合い

16:50~17:00 休憩 (チャットタイム)

17:00~17:40 全体共有と全体セッション~ふり返りと展望~

Zone D International <同時通訳あり>

International Initiatives on Collaborative Learning: Teacher Education and Professional Development

The Fukui Roundtable is held semi-annually in February and June. The Roundtable consists of five zones (A, B, C, D, E). Zone D International provides a platform for collaborative learning on practices and future prospects for teacher education reform inside and outside Japan.

The University of Fukui has been accepting a large number of foreign students who are engaged in teacher education through collaborative learning and has been maintaining its ties with the past foreign students by inviting them to the Roundtable to share their previous and current practices with practitioners from different countries. Moreover, since 2021, as part of its global development, the University of Fukui has been focusing on the Nalikule College of Education and its demonstration school in the Republic of Malawi and following the process of their reflective lesson study.

This Zone will consist of two sessions; Symposium and "Roundtable." In the symposium, the symposiasts will discuss the proposed approaches, results, and challenges in their contexts. In the "Roundtable," educators from various countries will share their practice and learn from each other in small group discussions. We hope that these examples will encourage you to reflect upon your own practices. These sessions will also be translated into Japanese.

Zone D では、実践における協働的な学びのプラットフォームを提供し、国内外の教員養成の展望を拓くことを目的とし、世界各国の教育関係者と実践や学びを共有し、捉え直しを行っています。

福井大学教職大学院では、世界各国からの留学生を受け入れています。福井ラウンドテーブルでは、探究型学習を通じた教師教育を受けた留学生が帰国後の授業実践の報告も行っています。加えて、2021 年からは、福井大学が行っているマラウイ共和国のナリクレ教員養成大学及び附属高校と協働・連携し、子ども中心の授業や協働探究学習について語り合ってきました。今回も引き続き、世界各国の様々な実践を聴き合う中でより良い子どもたちの学びについて探ります。この Zone においてはシンポジウムでの事例紹介とラウンドテーブルでの議論を通して、参加者自身の実践と省察が深まることが期待されます。

なお、本セッションは英語での議論となりますが、<mark>日―英の通訳を行います</mark>ので、ご希望の方は、申し込みの際に通訳希望としていただき、当日は通訳用の Zoom に接続するためのデバイスを<mark>別途</mark>ご用意ください。

Session I 15:00-16:00 Symposium

<Symposiast> 1. Lesson Study in Dzenza CDSS (Community Day Secondary School)

Chanya Bertha, Science teacher of Dzenza CDSS

2. Lesson Study in M. H. Greeff Primary School, Namibia
Uzuvira Tjomita, English teacher in Windhoek, Namibia

<Moderator> Mr. William Tjipto, University of Fukui <Commentator> Ms. Kyoko ISHII, University of Fukui

Session II 16:20-18:00 Roundtable Sharing and learning from each other's practices in small groups.

The following guest speakers are placed in each group: TBD

Ms. Desta (Ethiopia), Mr. Vwalika & Ms. Chiwaya (Malawi), Dr. Mokotjo (South Africa),

Ms. Kalule & Mr. Mudde (Uganda)+留学生、ALT

Closing 18:00-18:10 Mr. Kazuo KOBAYASHI

福井ラウンドテーブル 2024 SPRING SESSIONS

Zone E 探究 学びと教えのあたらしいすがたカタチをみんなで考える

Zone E 探究では、「学びと教えの新しいすがたカタチ(ニューノーマル)」をテーマにして、字どもたち・箬箸たちと失失たちが世代を超えて探究します。

子どもたち・著者たちの麓び・撃び・探索が学校から弛遠・世界へとひろがり、学校・教室内外の 遊び・撃び・探究の行き来がダイナミックにひろがる節で、子どもたち・若者たちと大人たちの撃びと 教えのあたらしいパートナーシップからそれぞれの憩いや大事にしていることを其背する価値に気づい てきました。そこで今間の Zone E 探究では、いくつかのテーマについてそれぞれの憩いや大事にし ていることを其背することで、どのようなあたらしい価値が全まれるのかを試してみたいと憩います。

1. 自 程 2024年2月17日(至)

11:00 - 11:15 受衍1

11:20 - 12:20 ポスターセッション1*

12:25 - 13:00 受付2

13:10 - 14:10 ポスターセッション2*

**ポスターセッションで、遊び・学び・探究・プロジェクトを発表してくださる字どもたち・岩智たち・ 大人たちを募集しています。ご発表いただいた芳には 福井大学大学院発行 発表認定書 をお贈りい たします。ポスターセッションの2つの時間の前後に、受付をおねがいします。

2. 会場 対論: 福井大学文宗キャンパス

受付 教育系1号館1階ロビー

ポスターセッション 教育系1号館1階・2教育系1号館1階の教室(予定)

ワークショップ 総合研究棟 I 13階 大会議室

オンライン: Zoom

ZoneF

「個」の視点から教育を再考する

-子どもと教師の接面を探る-

共生社会の実現、多文化共生、ダイバーシティの推進など、多様性が尊重される社会の実現は、我が国における一つの大きな課題となっています。多様性の尊重はマイノリティや社会的弱者といった一部の人々に関する問題としてクローズアップされがちですが、そもそも、私たちはみなそれぞれがユニークな存在であり、多様性を彩る一員です。つまり、多様性が尊重される社会とは、全ての人があるがままに生きることが大切にされる社会に他なりません。そうした意味でのインクルーシブな社会の実現には、全ての子どもがあるがままの存在として生き、育つことのできる教育の取り組みが不可欠です。この困難な課題に立ち向かうため、実践研究福井ラウンドテーブル 2021SpringSessions において「ZoneF インクルーシブ教育」は立ち上がりました。そして、実践研究福井ラウンドテーブル 2021SummerSessions 以降は、『ZoneA 学校』とのコラボレーションによって、多様な背景や困り感を持つ子どもも含めたすべての子どもが、あるがままの存在として生き、育つことのできる学校教育の在り方を探究してきました。その中で、一人ひとりの子どもに寄り添うこと、子どもの視点から学校の当たり前を問い直すことの重要性を再確認してきました。

多くの子ども達が共に学ぶ学校の中で、一人ひとりの子どもの思いを深く共有するのは容易なことではありません。しかし、一人ひとりの子どもに寄り添うためには、そして子どもの視点から学校や社会の当たり前を問い直すためには、一人ひとりの子どもの世界を知ろうとするまなざしを持つことが不可欠です。そこで今回の実践研究福井ラウンドテーブル2024SpringSessionsでは、個別具体的な子どもの姿の共有を通じて、子どもの世界をより深く知ろうとする営みとその意義について、参加者のみなさまと共に探究していきたいと思います。

○当日の予定 会場:アカデミーホール

オリエンテーション 14:30-14:40

話題提供 I 14:40-15:05 福井県立嶺北特別支援学校 教諭 桑島康郎

話題提供 II 15:05-15:30 福井大学教育学部附属幼稚園 教諭 上田晴之

指定討論 15:30-15:45 福井大学 南雲敏秀

全体討議 15:45-16:00

<休憩> 16:00-16:20

クロスセッション 16:20-17:40 前半の議論に基づき、校種等をクロスした小グル

ープ形式で参加者の思いや実践を共有します。

一般選抜入試日程のお知らせ

福井大学連合教職大学院 **学生募集日程(一般選抜)**

令和6年度第2回入試

出願期間: 令和6年2月15日(木)~21日(水)

試験日 : 令和 6年 3月 2日(土) 合格発表: 令和 6年 3月14日(木)



2/17,18 実践研究 福井ラウンドテーブル 2024 Spring Sessions

3/14 運営協議会

Newsletter は、教職大学院に関わる皆様の協力で作られています。 修了生の皆様もご自身の実践や近況について投稿してみませんか。 関心がある方は、dpdtfukui_nl@yahoo.co.jp までご連絡ください。

【編集後記】 驚愕の年明けとなった 2024年。能登半島地震発生時には、正月返上で長期実践研究報告書を執筆されていた方もおられたのではないでしょうか。本号には、「報告書執筆は辛く困難な道程ではあるが、書くことの意義や価値に改めて気づかされた」という声が数多く寄せられました。さて、能登地方には「しなうに任せる」という言葉があるそうです(2月1日付福井新聞『越山若水』より)。これは、「柳や竹は枝をしなわせて、降り積もる雪の重さに耐え忍び、その後雪を振るい落として、もう一度しゃんと伸びていく」という意味だそうです。報告書執筆という重さに耐え忍び、それを乗り越えて新たな教員人生をしゃんと歩んでいかれる院生の皆様と、震災にも「しなうに任せる」能登の人々に思いを馳せながらの編集となりました。(IO)

教職大学院 Newsletter

No.178

2024.2.13 公開版発行

編集・発行・印刷

福井大学大学院福井大学・

奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学

連合教職開発研究科

教職大学院 Newsletter 編集委員会

〒910-8507 福井市文京 3-9-1